

演奏会の再現(HP 収載)  
—演奏会と各種メディアの比較—

1. はじめに

このところ立て続けにギターリサイトを聴きに行き、また CD を求め、その中には重複したプログラムもありますので、あらためて演奏会の再現状況と演奏会と各種メディアの比較について整理してみました。

2. 演奏会と比較メディア

聴いてきた演奏会と CD は次のとおりです。

荘村清志ギターリサイト

[研究室日誌 2019.5.26](#)

[ディスコグラフィー2019.No.133](#)

ティボー・ガルシア

[研究室日誌 2019.6.17](#)

[ディスコグラフィー2019.No.136](#)

アナ・ヴィドヴィッチ

[研究室日誌 2019.6.23](#)

[ディスコグラフィー2019.No.137](#)

以上の他に BS 放送の録画も含め、その他[福田進一の CD](#)についても重複、もしくは類似のプログラムの曲を整理して、オーディオ資料室の[ギターリサイトと各種メディア](#)に掲載しました。

3. 比較メディアの試聴

荘村清志とガルシアと福田進一のバッハのシャコンヌの比較試聴ですが、荘村清志とガルシアの演奏会の印象を再現しており、荘村清志はかっちりとした構成、ガルシアはソフトタッチの演奏です。福田進一のシャコンヌは、ややアグレッシブな演奏で、バッハを聴いているという印象から遠ざかります。

ヴィドヴィッチと福田進一のバッハの無伴奏パルティータ 3 番の比較試聴ですが、ヴィドヴィッチは演奏会の印象を再現しており、繊細で優美な演奏であるのに対し、福田進一は男性的な印象があります。

荘村清志とヴィドヴィッチと福田進一の、それぞれバッハのチェロ組曲の 6 番、1 番、5 番の比較試聴ですが、荘村清志の 6 番とヴィドヴィッチの 1 番のライブ演奏の BS 放送録画は、演奏会の印象を再現してくれています。福田進一の 5 番は、シ

ヤコンヌや無伴奏パルティータ 3 番と同様、バッハとしては剛直にすぎるような印象です。

ガルシアのバッハの主よ、人の望みの喜びよとタンスマンのインヴェンションは、柔らかい音で演奏会の雰囲気再現されています。

荘村清志とヴィドヴィッチのラウロのベネズエラワルツは、記憶に頼りますが、いずれも美しく聴き応えがあり、ヴィドヴィッチの演奏は女性的な優しさにあふれるものでした。荘村清志の CD はオンマイク気味です。

ガルシアとヴィドヴィッチの BS 録画のバリオスの大聖堂および神の愛のほどこしは、ともに優雅で抒情性あふれる演奏ですが、ヴィドヴィッチの BS 録画ではオンマイクで直接音が強く入っています。

荘村清志とガルシアとヴィドヴィッチのタレガのアルハンブラの思い出は、記憶に頼りますが、いずれも美しく聴き応えがあり、特にヴィドヴィッチの演奏は優美そのものですが、BS 録画の方はオンマイク気味です。

荘村清志とガルシアとヴィドヴィッチの CD はいずれも演奏会の印象を再現していますが、荘村清志の CD はオンマイクで直接音が強く、ガルシアの CD はフランスのホール、ヴィドヴィッチの CD は教会の録音のため、間接音も強く入っています。

バッハに関する解釈は、荘村清志とガルシアとヴィドヴィッチと福田進一のそれぞれが固有のスタンスがあるようで、荘村清志は、日本人のバッハ像の標準的な解釈、ガルシアはスペイン系フランス人のエスプリの効いた解釈、ヴィドヴィッチはあくまで女性的で優美な感性に基づいた演奏であるのに対し、福田進一は独特の男性的な剛直な解釈のように聴き取れます。

ラテン系の音楽に関する解釈は、荘村清志とガルシアとヴィドヴィッチのそれぞれが固有の感性で演奏しており、ガルシアとヴィドヴィッチの方が、ラテン的な抒情性をよく伝えてくれている印象です。

#### 4. まとめ

以上のように、同一曲を聴き比べていきますと、演奏家による曲の解釈や表現が違っていることが分ります。また、演奏会の印象を CD や BS 録画で復習すると演奏会の印象をトレースできますが、会場や録音条件の違いによる音の違いも分かります。

以上